
 ニ ュ ー ス

日本の火山活動概況（2009年5月～6月）

気象庁



図 1. 2009年5月～6月に目立った活動があった火山

浅間山 (36°24'23"N, 138°31'23"E)

山頂火口では、5月3日03時20分頃、5月27日01時41分頃にごく小規模な噴火が発生した。いずれも、現地調査で山麓に降灰は確認されなかった。山頂火口からの白色の噴煙量はやや多い状態が続き、噴煙高度は火口縁上100～400mで推移した。

火山性地震は、山頂火口直下のごく浅い所で発生したと推定される低周波地震のやや多い状態が続き、振幅の小さな火山性微動もやや多い状態で推移した。また、2月2日の小規模噴火発生前にみられた、周期の短い低周波地震の増加はなかった。傾斜計では、火口直下浅部へのマグマ上昇を示す変化は観測されていない。

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測（期間中4回実施）では、5月は一日あたり800～2,900トン、6月は同400～1,100トンと、3月以降放出量は減少しているが、2008年7月以前と比べて多い状態が続いている。夜間に高感度カメラで時々みられていた微弱な火映は、今期間は観測されなかった。

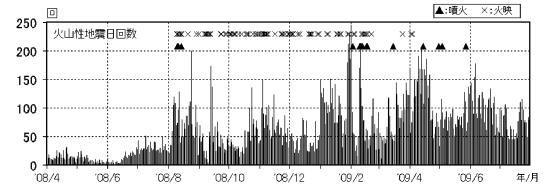


図 2. 浅間山 火山性地震の日回数（2008年4月1日～2009年6月30日）

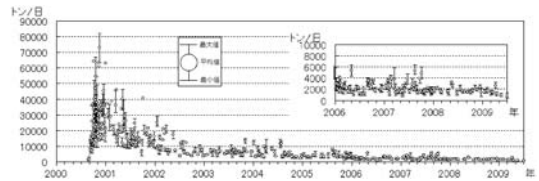


図 3. 三宅島 火山ガス（二酸化硫黄）放出量の変化（2000年8月26日～2009年6月30日）

山体周辺のGPS連続観測では、一部の基線で2008年7月初め頃からわずかに伸びる傾向が、引き続きみられた。光波測距観測では、2008年8月頃から山頂と山麓の観測点（山頂から南南東7km）の間が縮む変化はやや鈍化している。

三宅島 (34°05'37"N, 139°31'34"E)

山頂火口からの噴煙量はやや多い状態が続き、噴煙高度は火口縁上100～300mで推移した。

島内で実施した、COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測（期間中2回実施）では、二酸化硫黄放出量は一日あたり500～1,300トンと、依然として多量の火山ガス放出が続いた。また、三宅村の火山ガス濃度観測では、山麓で高濃度の二酸化硫黄が時々観測されている。

火山性地震は増減を繰り返しながらやや多い状態が続いている。発生した地震のほとんどがやや低周波地震（約3～10Hzが卓越する地震）で、高周波地震（約10Hz以上が卓越する地震）も時々発生した。震源はいずれも山頂火口直下浅部と推定される。また、火山性微動も時々観測された。

全磁力観測では、火山活動とみられる有意な変化は観測されなかった。

GPS連続観測では、山体浅部の収縮がわずかながら継

続している。

硫黄島 (24°45'03"N, 141°17'20"E)

独立行政法人防災科学技術研究所の観測によると、地震活動は落ち着いた状態で経過した。国土地理院の観測によると、2006年8月以降見られている島全体が隆起する地殻変動は5月中旬頃から、その傾向が鈍化している。

福徳岡ノ場 (24°17.1' N, 141°28.9'E)

5月5日及び20日に第三管区海上保安本部、また6月22日に海上自衛隊が行った上空からの観測では、福徳岡ノ場付近の海面に火山活動によるとみられる変色水域が確認された。福徳岡ノ場付近では、これまでも長期にわたり、火山活動によるとみられる変色水等が確認されている。

阿蘇山 (32°53'01"N, 131°05'49"E (中岳))

中岳第一火口では、南側火口壁の噴気孔からごく微量の火山灰噴出が時々確認された。夜間に行った現地調査では、同噴気孔から火災現象が時々確認された。

中岳第一火口の湯だまりの量は9割で経過し、表面温度にも大きな変化はなかった。

孤立型微動は一日あたり100~180回で推移した。

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中6回実施)では、二酸化硫黄放出量は一日あたり300~700トンと少ない状態で経過した。

桜島 (31°34'38"N, 130°39'32"E (南岳))

昭和火口では、5月から6月にかけて37回噴火が発生し、うち14回が爆発的噴火であった。これらの爆発的噴火で、大きな噴石が最長で5合目(昭和火口から500~800m)まで達した。

南岳山頂火口では噴火が11回発生した。

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中2回実施)では、二酸化硫黄放出量は一日あたり600~2,300トンで経過した。

火山性地震及び火山性微動は少ない状態で経過している。

国土地理院のGPS連続観測では、始良カルデラ(鹿児島湾奥部)の地下深部へのマグマ注入による膨張が続いている。

薩摩硫黄島 (30°47'35"N, 130°18'19"E (硫黄岳))

硫黄岳山頂火口の噴煙活動は依然としてやや高まった状態が続いており、噴煙高度は火口縁上概ね100mで推移した。

火山性地震はやや多い状態が続いている。発生した地震の多くがB型地震で、A型地震も時々発生した。また、火山性微動は観測されなかった。

口永良部島 (30°26'36"N, 130°13'02"E (古岳))

遠望カメラ(新岳火口の北西約3km)による観測では、新岳火口から噴煙が時々確認され、噴煙活動はやや高まった状態が続いている。

5月に行った現地調査では、前回(2007年11月)に比べて、新岳火口内の噴煙活動がやや高まり、熱異常域もやや広がっていた。また、古岳では火口内の噴気活動もやや高まっていた。全磁力繰り返し観測では、新岳火口直下での熱的な高まりを示すと考えられる変化が引き続き認められた。

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測では、二酸化硫黄の一日あたりの放出量は、2008年12月をピークに減少している。火山性地震は少なく、火山性微動も5月上旬までやや多い状態であったが、その後は少ない状態で推移した。GPS連続観測では、2008年9月以降、新岳火口浅部の膨張を示す変化が観測されていたが、2009年2月以降鈍化し、6月に入り認められなくなった。

諏訪之瀬島 (29°38'18"N, 129°42'50"E (御岳))

小規模な噴火が断続的に発生し、そのうち爆発的噴火は72回発生した。地震活動は、B型地震がやや多い状態で推移した。

(お知らせ)最新の火山活動解説資料は気象庁ホームページの以下のアドレスに掲載しています。

URL http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.htm

(文責:気象庁地震火山部火山課 道端秀和)

○教員公募

【東北大学】

1. 募集人員: 教授1名
2. 所属講座: 地学専攻, 地球惑星物質科学講座
3. 募集分野: (1) 地球惑星物質科学科の研究分野の一つを中心となって推進して頂ける方で、地学専攻内あるいは他専攻の研究者と協力しながらグローバルCOEのグループリーダー等を務めて頂くことが可能な方、(2) 先端的な研究分野において博士課程院生を指導し、若手研究者を世界に送り出すことに尽力頂ける方、が望ましい。
4. 担当科目: 理学研究科・理学部、全学教育における